

郡上市で映画「わが青春つきるとも」150名が観賞

中濃支部 川上 朝史

前中、T子さんと、映画「わが青春つきるとも」(伊藤千代子の生涯)の宣伝カーを回す。昨年、映画「時の行路」で一緒に廻ったコンビで、今回も同様に車は私の軽乗用車をゆっくり運転。ハンドスピーカーを車の横窓から突き出し、T子さんが自分で作った原稿を遠くまで聞こえないが、精一杯の音量で走る。市街地をほぼ回る。1時間の間、乗りっぱなしのT子さんの声が嗄

上映日の前日の午前中、T子さんと、映画「わが青春つきるとも」(伊藤千代子の生涯)の宣伝カーを回す。昨年、映画「時の行路」

で一緒に廻ったコンビで、今回も同様に車は私の軽乗用車をゆっくり運転。ハンドスピーカーを車の横窓から突き出し、T子さんが自分で作った原稿を遠くまで聞こえないが、精一杯の音量で走る。市街地をほぼ回る。1

上映日の6月18日(日)、天気は晴れ。映画「わが青春つきるとも」は150人が鑑賞。朝、郡上出身熱血教師の「かば」の大波スターを作つて会場に。その後、11日の中日新聞社説の治安維持法犠牲者記事と、映画「わが青春つきるとも」映画復興賞受賞記事をA3判で予想入場者数100枚印刷。午前、昨日回した映画「わが青春つきるとも」宣伝カーをT子さんと二人で回る。文化センターに先ほどの映画「かば」の大ポスターや映画復興賞ステッカーとA3コピーリーフletsを届ける。会場準備は11時半から何人かが集まり受付・ポスターなど準備。アンケート鉛筆な

岐阜県版
第396号
2023年7月15日

治安維持法同盟
岐阜県本部
〒500-8879
岐阜市徹明通7-13
岐阜県教育会館308号室
Tel 058-252-5366
振替00840-2-88638

私たちの運動の基本
ふたたび戦争と暗黒政治を許さないために

- 一、治安維持法体制の復活に反対する
- 二、国は、戦前の治安維持法が、人道に反する惡法である事を認めるここと
- 三、国は、治安維持法の犠牲者に、謝罪と賠償をおこなう事



どはRちゃんが用意。午後12時半、会場へロビーでいろんな人と出会い話をする。開演まで細かく話したが、午後はカットし第40回映画復興賞受賞を押し出し、日時・場所・料金などのみにする。暑い中、1時間T子さんの喉が嗄れる。

上映日の6月18日(日)、天気は晴れ。映画「わが青春つきるとも」は150人が鑑賞。朝、郡上出身熱血教師の「かば」の大波スターを作つて会場に。その後、11日の中日新聞社説の治安維持法犠牲者記事と、映画「わが青春つきるとも」映画復興賞受賞記事をA3判で予想入場者数100枚印刷。午前、昨日回した映画「わが青春つきるとも」宣伝カーをT子さんと二人で回る。文化センターに先ほどの映画「かば」の大ポスターや映画復興賞ステッカーとA3コピーリーフletsを届ける。会場準備は11時半から何人かが集まり受付・ポスターなど準備。アンケート鉛筆な

終わって拍手があちこちで聞こえた。予想の100人（目標200人）を超えて150人（当日券58枚、前売り協力券91枚、大学生1人が来てくれた。嬉しかった。

10日ほど前、高校生に見てもらいたいと早朝校門前で400枚近く声かけしてチラシとお願い文書を配布したが誰も来なかつた。校長にも直接話もしたのに、意外だった。協力券は実際入場者数より40枚近く多く出ていて全市新聞折り込み、ケーブルテレビ有料広告やポスター張りだしの費用等をわずかに上回り採算は取れた。縁の下の力持ちRちゃんなど其他多くの皆さん協力のおかげで無事上映会を終えた。

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟

第36回岐阜県本部大会案内

とき 2023年7月29日(土)

午前10時～12時

ところ アピセ閣 第1研修室

関市平和通7-1-1

内容

- ・2022年度活動報告・決算・監査
- ・2023年度活動方針案・予算案
- ・役員選出

「岐阜啄木祭」2023、新日本歌人「東海近県集会」を開く

新日本歌人協会岐阜支部 竹中トキ子

新日本歌人岐阜支部は六月三日に「岐阜啄木祭2023」を開催する初めての会を開催する。午前、午後の同日に午前は岐阜駅内のペートフルスクエアで行ないました。前日は台風2号が通過し、当日は新幹線、高速道路も止まり静岡からの参加者は全員が（10人以上）欠席でした。参加者は啄木祭八十六人、近県集会50人の参加でした。

集会には多くの来賓が来られ、メッセージをいただきました。なぜ同日に初めてという集会を開いたのか、それは、新日本歌人協会近県集会開催の当番県であった三重県が、会員の病気などで、開催が困難とな

り、昨年の六月になつて岐阜県で行えないかと要望されたからです。コロナ禍での他地域の近県集会の開き方を聞き、岐阜が担当するのであれば、以前から啄木祭を開きたいと声があり、のびのびになつて啄木祭を同日に開けないと、思い切つて提案したのでした。

啄木祭とは一九四六年四月に、新日本文学界、新日本歌人協会、自由懇話会の共催で第一回啄木祭が一ツ橋共立講堂で行なわれ、七〇〇名が参加をしています。翌年には、啄木祭は全国各地にひろがっています。啄木は「生活」を歌うことを残しました。

会場を早く決めるために岐阜市の後援をとり、また、県の年金者組合、県教職員組合、新日本婦人の会県本部の後援をいただきました。実行委員会は、六十代初めの全国幹事を事務局長に、七十代を中心に行委員会として取り組みました。

碓田のぼる先生からほかの用事で電話をいたいたとき、「岐阜啄木祭」の取り組みをはじめた」と、記念講演をお願いしたいと話したところ「まだ大分先ですね。そのとき元気だったら行きますよ」と言つてくださいり、喜び勇んでどうくみました。

低気圧と二号台風の悪天候のなかイタリアに住んでいる孫娘さんも同行され、息子さんの運転する車で、嵐の中を我孫子から岐阜へ

来られた、九五歳の先生の講演は
参加者の感動をよびました。

死を前に啄木が発見した「国民が

団結すれば勝つ」「多数は力なり」と

先生の講演は、いまを生きる現代の
私たちに伝えるような啄木の言葉で
した。感想文には「これから生きてい
く勇気をもつた」と書いた人もあり
ました。

歌声の湯上芳美さんに「啄木を歌つ
てほしい」とお願いするなど、啄木を歌つ
たことはないと言しながら、楽譜集め
に苦労され、その中から「不來方の」
「ふるさとの山に向かひて」の二曲を
歌われ、初めて聴いた「啄木」に「歌
声は心にしみ、感動した。母が啄木
を好きだった」とを思い出し懐かし
かった。参加できてよかったです」など感
想文がよせられました。



自由民権と声の新聞・演歌

岐阜支部 堀田 紀治

自由民権運動の中で声の新聞・演歌
の果たした役割を述べましたが、そ
の内容を幾つか紹介します。

【明治二〇〇～二五年】

【ダイナマイト節】(演歌社士団作詞)

※民権論者の涙の雨で

みがき上げたる大和胆(やまとぎも)

「クリミンブクゾウシンシテ

若しも成らなきや ダイナマイトどん

※治外法権 撤去の夢を

見るもうれしいポルトガル

コクリミンブクゾウシンシテ

ミンリヨク キュウヨウセイ

若しも成らなきや ダイナマイトどん

※テコでも動かぬ 私の節操(みさお)

いつか立てずにおぐべきか

コクリミンブクゾウシンシテ

ミンリヨク キュウヨウセイ

若しも成らなきや ダイナマイトどん

※四千余万の 同胞(そなた)のためにや
赤い囚衣(しきせ)も苦にやならぬ

コクリミンブクゾウシンシテ

ミンリヨク キュウヨウセイ

若しも成らなきや ダイナマイトどん

※悔やむまいぞや 苦は樂の種

やがて自由の花が咲く

コクリミンブクゾウシンシテ
ミンリヨク キュウヨウセイ

若しも成らなきや ダイナマイトどん
※悔やむまいぞや 苦は樂の種
やがて自由の花が咲く



◎カタカナ部分は「国利民福増進して民力休
養せ」で「民力休養」は、自由党の第一のキャッ
チフレーズで、「ダイナマイトどん」と激しいのは、
壮士達はあとにもづく「ヤツケロ節」「グンツ
節」とか、「ヒサヒサキンギングな表現を好み、
節にも「武士」「武志」とあてじをして楽し
でいます。

(出典 添田知道著、演歌の明治大正史から)

戦前の日本

恵那支部 田口 進

(一)はじめに

私は一九三三年十一月十五日(昭和八年)岐阜県多治見市弁天町一丁目の家で父繁晴、母かずの二男として生まれました。

その年の二月二十日には「不在地主」「蟹工船」で有名なプロレタリア作家小林多喜二が築地署の特高警察につきまり、拷問され、その日のうちに殺されました。

この野蛮な行為に世界的な文学者の「ロマンロラン」「魯迅」等多くの文学者から、抗議と哀悼の言葉が寄せられました。

日本でも文通のあつた葉山嘉樹は日記に二回にわたりて長文の哀悼の言葉を書き残しています。

松本清張の昭和史発掘によると、地下にもぐつていた多喜二は詩人の今村恒夫と二人で共産青年同盟の責任者と連絡をとり、そこに築地警察の特高が五、六人待っていた。

多喜二は身をひるがえして走り出ましたがそこから人通りのある電車通りまで二百メートル以上の距離があった。

北海道で鍛えた多喜二は足が速くみるみる特高達を引き離した。しかし、苦しい呼吸になった。そこを特高は狡猾にも「泥棒、泥棒」「誰つかまえくれ」と口々に叫んだ。

付近にいた人たちが多喜二にとびかかり多喜二は倒れた。そこ特高がとびかかり今村恒夫と共に逮捕され、築地警察署に送られた。

署内で二時間に渡つてぶつ続けの拷問が加えられた。たたの拷問ではなく明らかに殺人であった。

多喜二は有能な文才を持つ小説家であった。三十一歳の若さで命をたたれた。

(二)治安維持法違反と不敬罪

戦前の国、國家権力は多喜二に治安維持法違反だけでなく不敬罪も適用していた。

蟹工船の文中に不敬にあたる文字があると言ふがこれは小説の中での会話として出てくる場面の話である。

しかし、多喜二の死以後日本は文学、芸術、演劇、哲学とあらゆる分野の学問に対する攻撃となり、戦争への道を突き進んで行

きました。中国の東北部、満州への侵略拡大は中國との全面戦争となり、発展し、アメリカ、イギリス等列強諸国との矛盾を深めていった。

「私の幼少年期はまさに日本の十五年戦争の真っ只中にありました。」

一九三六年、軍のクーデター、一一一二六年事件が起ったことの事件を利用して戦争目的達成のため国力を総動員する「国家総動員法」を制定した。

実態は国民の私有財産を国と軍が制限するための法律で食料や生活必需品の売り買いも制限された上、家の鉄のナベや釜、橋の欄干を切って供出させられた。お寺の鐘も出された。国民は戦場や工場に駆り出されるようになつた。「一日、米三合」の配給制度



だつたが国民に米は配給されず軍隊に持つて行かれ、サツマイモ、大豆、豆かすが配給七〇%以上を占め、その上欠配は日を追う毎に常態化していった。

僕たちの幼い頃は食べる物は山に入り、木の葉、トカゲ、ヘビは焼いて食べた。蝮(まむし)等は上等の食べ物で照り焼きにして食べたが、いつもいつも腹をすかしていた。

一九四〇年、日本はドイツ、イタリアのファシズムと「日独伊三国同盟」を結んだ。これに対し、アメリカが日本に対し強烈な経済制裁をかけた。日本は資源を輸入していた最大の相手はアメリカであった。

一九三九年の時点で日本は鉄鉱石と石油の七割をアメリカから輸入しており軍需兵器を作るための工業機械六割がアメリカ製品で占められていた。

一九三九年七月アメリカは日米貿易の基礎である「日米通商航海条約」の破棄を日本に通達してきた。

やがてアメリカは日本のインドシナ半島進駐とほぼ同時に在米資産と石油の全面輸出を停止した。他の国々も次々と日本との貿易を取りやめた。日本に備蓄された石油は

二年分しかなく軍と国家の運営は前途がまづくら闇となつた。

石油の全面禁輸によって軍部は大きな衝撃を受けた。この頃の日本軍は日中戦争だけで一日、約一万2000トンの石油を消費しておりのまま日本の侵略戦争が拡大していくば備蓄も底をつけ軍事行動そのものが不能になる事は明かであった。

日本の進路に求められたのは「侵略戦争から手を引き、日米を始め世界各国との通商条約を復活させるのか」「戦争拡大の道を選ぶのか」のどちらかの道しか残されていなかつたのである。

しかし、日独伊(軍事同盟)を結んだドイツはポーランドを侵攻し、更にフランスをたたいた



一ヶ月で占領するという強さを見せた。日本はこの強力なドイツ(ファシズム)と手を組めばこの苦境に立たされた戦況を開拓できると日本の軍国主義支配階級は泡のよう期待に前途を託したのではないか。

当時、アメリカの工業生産力は日本の二〇倍といわれていた。

(三) 日米開戦にすすむ

アメリカの経済封鎖に追い詰められて「どうするか」問題になり「先制攻撃するしか方法がない」と言うことになった。

だが日本の首脳部の中にも日米開戦に消極的な意見は少ながらずあつた。そのため内閣府と陸軍はそれぞれの立場から「日米開戦のシミュレーション」を行なつた。

その結果、いずれの結論も「石油の備蓄がある二年間は戦争を維持できるがその後日米開戦は、軍事行動は出来ない」となつた。

日本はなぜ日米開戦を急いだのか。
戦後わかつた事によると「昭和十六年十一月一日、昭和天皇が出席した御前会議で秘密裏に日米開戦の決定した」と記録に残っていると発表されているが実際にはもつと早く決めたと言われている。

山本五十六司令長官は真珠湾のアメリカ

戦争責任を憲法上持つていたのである。

太平洋艦隊奇襲攻撃はもと早くから綿密な計画を練つて進められていた。

日本軍はアメリカ側に機密が漏れないように一切の無線通信が禁じられていた。艦内電話すら使われなかつた。

(四) 昭和天皇の戦争責任

明治憲法は天皇の地位について「主権は天皇にある」と明記し、国家元首として大日本帝国を統治する事を明かにし、日本の国体とは天皇が国を統治する制度でした。

又、「天皇は神聖にして侵すべからず」と定められ昭和十八年頃には学校教育の中でも「天皇は現人神（あらひとがみ）」と教えられ、神聖不可侵な存在で「大元帥陛下」として戦争の最高責任者でした。

学校でも校長先生が直立不動の姿勢を取つて「おそれおおくも天皇陛下にあらせまして」と言つて腰を九十度に曲げて御真影を拝み「教育勅語」を読み上げそれを低頭して聞く子ども達は栄養不足でたうておれずに倒れる子もたくさんいました。どうどくした鼻水が出て「直れ」という号令と共に一斉に鼻水をする者が全体にひびきました。

東南アジア諸国人民の一〇〇〇万人以上の人々が殺された。日本はの犯した罪のつぐないを永劫はらいづけなければならない。

一九四五年一月、近衛文麿は昭和天皇に上奏文を出した。内容は「のまま戦争をつづければ日本は連合軍の総攻撃によつて壊滅させられる一刻も早く連合軍の降伏勧告を

受けねばだ」というものであった。

日本海軍はハワイ真珠湾攻撃をして太平洋戦争が始まりました。しかしこの勝利は一回だけでアメリカは政治経済を戦争態勢に切り替え、軍需生産を拡大し反撃を始めた。

ミシドウエー海戦で日本の連合艦隊はほぼ殲滅（せんめつ）し、つづくソロモン海戦、レティ海戦で日本は完全に制海権、制空権を失いました。にもかかわらず「日本は大戦果をあげた」と大本営発表を続け、国民には「ほしがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵だ、鬼畜（きそく）を新聞、ラジオ、ジャーナリズムもそつローガンを大うその捏造の報道をくり返しました。

(五) 一五年戦争を生き残つた者の責務

一九三一年の中国東北部「満州」への侵略以来十五年間の侵略戦争は、日本兵三百十万人の戦死者、その六割～七割が「餓死」と言われている。

日本の敗戦、僕は小学校五年生だった。

つづく

その半年の間に二月十日の大空襲、沖縄戦、大都市の空爆で日本全国が焼土化し、八月の広島、長崎の原爆が投下された。

アメリカは在庫でかかえていた武器と弾薬全部日本に落とし「産軍複合体」軍事産業は大儲けをした。

